

# 日本海上越沖海鷹海脚における ADCP による海水柱の流向流速分布測定

## A full current profile measurement by ADCPs at Umitaka Spur off Joetsu region, eastern Japan Sea

山崎 哲生 [1]; 武内 里香 [2]; 物江 大輔 [3]; 大見 智亮 [4]; # 中田 喜三郎 [5]; 福島 朋彦 [6]; 角皆 潤 [7]; 張 勁 [8]  
Tetsuo Yamazaki[1]; Rika Takeuchi[2]; Daisuke Monoe[3]; Tomoaki Ohmi[4]; # Kisaburo Nakata[5]; Tomohiko Fukushima[6];  
Urumu Tsunogai[7]; Jing Zhang[8]

[1] 産総研・地質情報・海底系 R G; [2] 東大・理・地球惑星; [3] (株) 中電シーティーアイ; [4] (株) 中電シーティーアイ; [5] 東海大・海洋; [6] SOF 海洋政策研究所; [7] 北大院・理・地球惑星; [8] 富山大・理  
[1] Seafloor Geoscience G., Inst. for Geology & Geoinformation, GSJ, AIST; [2] Earth and Planetary Sci., Tokyo Univ; [3] ChudenCTI Co.,Ltd.; [4] Chuden CTI Co., Ltd.; [5] Marine Science & Technology, Tokai Univ; [6] Institute for Ocean Policy,SOF; [7] Earth & Planetary Sci., Hokkaido Univ.; [8] Sci. Faculty, Toyama Univ.

海底の活動的な冷湧水系等から供給されるメタンフラックスを定量的に把握することを目的に、海底からの活発なメタンガス噴出が観測されている当該海域で、淡青丸 KT-06-26 調査航海において、海面から海底までの流向流速分布、CTD、海水中のメタン濃度の系統的観測を実施した。

このうち、流向流速分布の測定では、3 台の ADCP (音響式ドップラー流向流速計。測定レンジ 180m × 2 台と測定レンジ 120m × 1 台) を組み込んだ係留システムを水深 910m の海底に設置し、海底面上 20m から 500m までの流向流速分布を計 58 時間測定した。同時に、淡青丸の船底艦装 ADCP (最大レンジ 700m。通常は深さ 400 ~ 500m 程度まで有効) による海面からの流向流速分布測定も実施し、これらデータの組み合わせによって、海底から海面までの流れ場を把握した。また、係留システムの最上部には 2 台の三次元流速計も組み込み、船底艦装 ADCP のデータを補強することにした。図に繫留系を示す。

